

病いと科学

柳澤桂子

科学崇拜への道

古来、病気は天変地異や外敵とともに、私たちの生存をおびやかす脅威であった。しかし、一九世紀の終わりから二〇世紀のはじめにかけて、伝染病が病原菌によって引き起こされることがあきらかにされ、病気というものの見方に大きな変化がもたらされた。病気は不可解なものでも神の怒りでもなく、科学という方法によって理解できるものであると考えられるようになった。

その結果、苦しむ人の世話をするだけでなく、そこから病気というものだけに目を向けて、それを分析することで、治すことができるかもしれないとい

う大きな希望が、人々の心に目覚めた。しかし、実際に結核をふくめたいろいろな伝染病を克服できるという確信をもてるようになったのは、一九六〇年代になってからである。この時代には、医師も一般の人々も、やがてはすべての病気に科学の力で克つことができるという希望をもっていた。

しかし、これは幻想でしかなかった。癌や慢性病は病原菌によって引き起こされる伝染病とはちがうのである。そして、人はいずれ死ななければならぬ。けれども、伝染病に対する勝利を、医師も一般の人々も簡単に手放そうとはしない。「すべての病気は科学の力で理解できるものであり、治療することが可能になる」という希望は根づよく人々の心に

残っている。

身近な人を癌などで失って、科学の力でも治すことのできない病気があることを経験した人でも、「すべての病気は理解できるものである」という強い確信をもっている。「科学はすべての病気を理解できる。科学は全知である」という意味において、それは信仰にも似ている。かつて、神のみにあたえられていた能力を人々は科学に求め、それを信じたのである。

科学信仰は、一般の人々ばかりでなく、医師にも強い。医学が成功をおさめていくにつれて、病人を選別し、命令をあたえる人としての医師の権限も強くなっていく。さらに、社会保障制度がととのえられていくにつれて、医師は病人に診断をくだし、働かない権利を認める権限をもつ人として、ますます力を得る。

医師自身の科学に対する信仰と、このような社会的な地位の確立にともなって、医師は強い自信をもつようになる。また、一般の人々も、かつての呪術師のように、どのような望みもかなえてくれる人として、医師に依存する状況が生まれた。

科学の限界を忘れる

西洋医学はものごとの原因と結果を追求する。そのために症状を分析して、測定し、数値としてあらわす。病気を数値化することによって、つかみどころのない病気というものに、誰の目にも理解しやすい尺度をあたえることになる。

病気を数値化すれば、統計処理をすることもでき、集団としての人間のなかで、何が正常であり、何が異常であるかということまでも、数値ではつきりと出てくる。ここには、人々を数値の魔術に引き込む危険が満ちている。

科学はどのような問いにも答えられるものではない。答えられる問題を見つけたして、それに答えるのが科学である。病気についていえば、まず、病人と病気を切り離して、その症状にだけ注目する。次に症状のなから、測定可能なもの、検査可能なものを取りだす。検査の結果を症例に照らしあわせて判断して結論を出す。

これだけの過程を見ても、非常に多くのものが切り捨てられているということが推測される。おそら

く、あきらかにされたことはごく限られた部分であり、ほとんどの部分が切り捨てられているのである。しかし、ある特定の病気を治療するためには、それで十分であることが多い。

ここで問題なのは、医師も一般の人々も医学が出した答えにだけ注目して、答えられていない部分には注目しないことである。注目しないどころか、そのような部分が切り捨てられていることにさえ気づいていない場合が多い。

その結果、科学はすべてのことに答えられると思いついてしまう。科学が万能であるかのような錯覚に陥るのである。医学が病人と病気を切り離して、人間を無視していることも忘れ、検査データが人間のからだの状態のほんの一部についての情報をもたらしているに過ぎないということも忘れてしまう。科学に限界のあることを忘れてしまうのである。

なかでも一番大きな問題は、医学が人間を排除しているということであろう。しかし、科学としての医学は本質的に分析不可能なものは扱えないのである。人間という存在もそれを取りまく環境もすべて視野の外に置いて、病気の症状にだけ注目してそれ

を分析することこそ科学なのである。

自己感覚の否定

科学は人間そのものをも排除してしまうが、人間のもつ分析できない問題についても打つ手をもたない。たぐさんの分析不能な問題のなかで、現在の医学がもつとも注目しているものに痛みと死がある。

現在の医学では、痛みそのものを測定することはできないので、医師は間接的なデータから痛みの程度を判断する。医師が痛みがないと判断した場合に、患者が痛みを訴えても無視されることになる。そこでは医師は神のように完璧であり、痛みのように患者本人にとつてあきらかな感覚さえも否定する能力をそなえているように信じられている。

痛みというのは、本来からだにそなわった警告信号である。おそらくおなじ状況に陥ったときにどれくらいの痛みを感じるかということには個人差があるであろう。しかし、個人差というものも、科学の苦手とするところである。

痛みの研究が進むと、痛みの分析がはじまる。痛みには、生理的痛み、心理的痛み、霊的痛みがある

という。生理的痛みに関しては、鎮痛剤などで対処し、心理的、霊的痛みに対しては、また別の対処が必要であるという発想である。生理的痛み以外の痛みの存在に気づかなかったときよりは、状況が改善されたかもしれない。けれども、あくまでもそのことを分析しなければ対処できない科学の本質が、ここにはよくあらわれていると思う。

医師の判断によって、医学的に証明されたと考えられる痛みに対しては、いろいろな処置が施される。医師は、病人そのものは自分の視野から閉め出して、痛みだけに注目する。病人は、痛みという自分だけにしかわからない感覚を医師に取りあげられてしまう。患者はもはや自分の痛みと闘う必要も耐える必要もなく、すべてを医師にゆだねる。医師に依存してしまうのである。

ここでは、たぐさんの病いの苦しみのなかから、痛みを一つの例として引いたまでであって、痛みを取り除くことそのものを批判しているわけではない。

このようにして、病人から苦しみを受容する能力が次第に奪われていく。医師という絶対者を信じ、すべてをゆだねってしまった患者は、自分の足で立つ

能力を失ってしまう。自分の病気も痛みも死も、自分の問題として受けとめることができなくなる。依存性は無能力へと変貌する。

このような状況で、患者の自己決定権を議論してもはじまらない。病気とそれにとまなう苦しみを患者に返し、患者がそれを自分のものとして受けとめている状況ではじめて、自己決定という考えが成り立つのである。

科学の功罪

病気の治療において、科学は確かに多くの利益をもたらした。病気のメカニズムを解明し、中心静脈輸液、超音波診断、麻酔など優れた技術も開発した。しかし、私たちは科学の限界を忘れ、科学を過度に信じた結果、病気から人間を排除し、人間本来の自己感覚を否定し、病人が苦しみを受容する能力を奪ってしまった。

また、病気という、病人とは切り離せない状態に病名をつけるという行為によっても、大きな問題がもたらされる。この問題は、一人ひとりの病人によつてちがうので、議論することさえむずかしいが、

その社会的影響は計り知れないものがあると私は考えている。

さらには、科学の名のもとに発せられるいろいろな情報が人々の健康感を侵食する。動物本来の「何も苦痛を感じない」という健康ではなく、検査データに依存した「正常値」が健康の基準になる。統計的な中心値からずれたためにつくりだされた「病人」が出現することになる。

また、医師が痛み、癌、死などに注目することによって、それが社会に伝播し、社会はますますそれらのものを恐れるようになる。人間として受容すべき問題として受けとめるのではなく、社会の注意がそこに集中され、社会現象としての恐れを生み出す。このように、特定の問題にだけ注意を集中する医療には、何か片手落ちのものを感ずるし、そのようなものを排除しようとする世の中にも、人間本来の姿から遊離したものが感じられる。

遺伝子診断、遺伝子治療、クローン人間の作成など、科学は生命倫理的に多くの問題をはらむ技術を次々に開発している。これらの技術そのものに問題があるのではなく、それをいかに応用するかという

私たちの考え方に問題があると私は考えている。科学の進歩に見合った人間の成熟が要求される。

特にこのような科学技術が、経済的利益と結びつくときに、私たちは大きな誤りを冒す可能性がある。科学の限界を考え、人間の限界をわきまえて、謙虚に自然と向き合う姿勢が、今、特に必要とされているのではなからうか。

（仏教）97・5月号

それぞれの樹にそれぞれの実りある秋景にたつ裸樹のこと

白洲正子

「白洲正子対談集成」河合隼雄／山折哲雄／車谷長吉／目崎徳衛他
「エッセイ」志村ふくみ／高橋睦郎／光野桃…他

金子みすゞ

「インタヴュー」上村ふさえ 母のこと
「エッセイ」西條八十／天沢退郎…他

手塚治虫

「初公開」手塚治虫絵コンテ集成／Tノブシ他
「対談」萩尾望都×山口昌

淀川長治

「対談」蓮實重彦×金井美恵子 北
映画塾最終講義「エッセイ」大林宣

黒澤明

「対談」ビートたけし×黒澤明 ヴェ
井上陽水、ソクローフ、宮崎駿他「イ

須賀敦子

「対談」池内紀×松山巖／須賀敦子
夏樹／タフキ／吉本ばなな他「エッセ

愛読者カード

●本書を何でお知りになりましたか。

- ・新聞広告で () ・新聞の記事で ()
新聞名() 新聞名()
・雑誌広告で () ・雑誌の記事で ()
雑誌名() 雑誌名()
・テレビ、ラジオで () 番組名()
・店頭で見て () ・店頭ですすめられて ()
・知人の話を聞いて ()
・その他 ()

●本書についてご意見、ご感想をお聞かせ下さい。

●今、あなたの興味のある人物、もしくはテーマをお聞かせ下さい。

●今後、「文藝別冊」でとりあげて欲しい特集(文学に限らず)があればお聞かせ下さい。

アジアントラヴェラーズ

「写真」小林紀晴「インタヴュー」沢木耕太郎／蔵前仁／西川敏晴
「旅するブックチャートBEST100」…他

河出書房

KAWADE夢ムック

文藝別冊

【総特集】柳澤桂子

2001年1月30日発行

編集人

西口 徹

発行人

若森繁男

印刷人

北島義俊

発行所

株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話：03-3404-1201

http://www.kawade.co.jp/

印刷所

大日本印刷株式会社

東京都新宿区市ヶ谷加賀町1-1-1

本文組版

さんごどう

定価1200円(本体1143円)

©KAWADE SHOBO SHINSHA
Publishers

2001 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
本誌掲載記事の無断転載を禁じます

【文藝別冊・バックナンバー一覧】

- 「永山則夫」
- 「90年代」文学マップ99」
- 「タカラヅカ」
- 「須賀敦子」
- 「黒澤明」
- 「淀川長治：ありがとう、映画の語り部」
- 「手塚治虫」
- 「J文学ブックチャートBEST200」
- 「スター・ウォーズ」とジョージ・ルーカス」
- 「Jコミック作家ファイルBEST145」
- 「宇多田ヒカル」
- 「金子みすゞ：没後70年」
- 「Jフォトグラファー」
- 「白洲正子」
- 「グレン・グールド：バッハ没後250年記念」
- 「Jミステリー」
- 「安倍晴明：陰陽師・闇の支配者」
- 「作家と猫」
- 「最恐ホラー・ナビ2000[日本篇]」
- 「Asian Travellers」
- 「水上勉：穂しと鎮魂の文学」
- 「心の詩集」
- 「カザルス：バッハ没後250年記念」
- 「ジョン・レノン：没後20年」
- 「まど・みちお」
- 「幸田文：没後10年」
- 「赤軍：1969→2001」

ご注文のしかた

●ご注文は最寄りの書店にお願いいたします。書店の店頭で品切れの場合も、当社に在庫のあるものは、書店がお取り寄せいたします。
●当社より直接お求めの場合は、営業部(電話03-3404-1201)までお電話下さい。お届けは代引き宅急便でおこないます。その際、代金は書籍代金(本体価格に消費税5%を加算)のほか、宅急便代として380円を申し受けます。なお、ご注文からお届けまで7～10日を要する場合がございます。あらかじめご了承下さい。

*2月刊行予定

●「ビル・エヴァンス」

編集後記——現在、クロニク技術や、ヒトゲノムの解読など、生命科学の領域では、研究が急速に進んでいる。それとともな、脳死問題など、生命倫理の検討も、きびすを接して大切になっている。双方に、もう目をそむけては行けない。が、この領域は関心があっても、なかなか手にとりにくいかもしれない。そんなときに、わたしたちは、柳澤桂子さんをえた。柳澤さんは、その両方にまたがり、死の淵の深い体験をふまえて、的確でかつ詩的な言語で、わかりやすくそこへ案内してくる。これまで、科学者は一般に、神秘的でわかりきれない領域を凌駕してきた。柳澤さんへの信頼は、おそれることなく、自然の声を、科学のほうを参照しながら、届かせてくれることも与って大きい。そんな、弱い遺伝子という差異が生みだす自然(生)の摂理を直観しようとする、ひとりの美しい人の声を届けたい。特集に際し、柳澤さんには多大なお世話になり、ありがとうございました。また、草思社の田中尚史さんをはじめ、各編集者のお力添えにも感謝します。写真のそれぞの短歌は、いずれも柳澤さんが詠み綴られたものの中から使わせていただいた。

ご協力ありがとうございました。読者の皆様の貴重なご意見として、今後の出版活動に役立てさせていただきます。

【アルバム】
柳澤桂子 生の軌跡

【インタヴュー】 聞き手 佐田智子

柳澤桂子

いのちのこと、自然のこと ある生命科学者の軌跡 そしてこれから

【エッセイ】 頼りになる仲間 柳澤さん

中村桂子 大五郎椿の生命

安田暎胤 同い年のエール

【小説】 柳澤桂子 父のこと

【エッセイ】

柳澤桂子 鳥と恐竜

【短歌鑑賞】

多田道太郎 患いはじめてから十余年が過ぎていた

【自選歌集】

柳澤桂子 生あるもの

【対談】

柳澤桂子 夏樹静子

病が与えてくれたこと 自分をどうまで小生んできるか

柳澤桂子 中村桂子

生物学のロマン時代に出会って

【評論】

吉田基子 高橋敬基 佐倉統

友・柳澤桂子
いない神に祈る ミスゴジ、あるいはそれのこと
知識の差異と進化 あるいは二重らせんの私たち

【柳澤桂子コレクション】

柳澤桂子

あなたに記憶が見えますか
想像する脳
秩序と混沌
死なない人間
死にも三十六億年の歴史
死が頭わにするもの
生命の歴史の流れ
生命の質は選べるのか
病いと科学
いのちの風景
短歌とは何か
私の好きなもの

河出夢ムック 文藝別冊

総特集 柳澤桂子
生命科学者からのおくりもの
目次 CONTENTS